

いままで少なかった浅間山麓の縄文時代の遺跡は、本遺跡に続いて郷土遺跡や屋代遺跡などに縄文中期の様相を明らかにしていくことができよう。

(註) 筆者はかつて加曽利 E 3 式新段階の遺跡を報告した際、施文手法の手順に着目して充填縄文をもって加曽利 E 4 式土器とした (本橋1986)。

2 浅間山麓の敷石住居址

(1) 中期後葉から後期初頭の遺跡分布

浅間山麓では、標高800から900m辺りに遺跡が分布している。浅間山麓では滝沢遺跡、西荒神遺跡、佐久市三田原遺跡群・岩下遺跡、湯川を挟んだ森泉山麓では、宮平遺跡をはじめ、軽井沢町市茂沢南石堂、南側に佐久市吹付遺跡・西片ヶ上遺跡が分布する。これらの遺跡の立地は、千曲川に注ぐ小河川に開析された台地縁辺部もしくは低位段丘面にある。

(2) 柄鏡形敷石住居址の様相

宮平遺跡では、加曽利 E 3 式期では円形竪穴住居址であったが、加曽利 E 4 式になると敷石住居址に変わり、後期初頭を経て堀之内 1 式期まで敷石住居址がみられる。宮平遺跡は調査範囲が限られているために明確ではないが、J-9 号住居址では、円形の主体部に対ピットがみられ、柄鏡形住居址であったことがわかる。同様にして、滝沢遺跡でも J 10 号住居址や J 8 号住居においても主体部の掘り方は円形ないし方形ではあるが、大きさや位置において対応する対ピットが存在することによって上屋構造が柄鏡形住居址と大きく変わらないものと考えられる。

御代田や佐久地域においては加曽利 E 4 式期では、このような掘り方まで明確な柄鏡形を呈する住居址はみられないようであるが、後期初頭になると滝沢遺跡に近い三田原遺跡群 3 号住居址では柄部にまで敷石が施される柄鏡形住居址がみられる。佐久市吹付遺跡や小諸市郷土遺跡では、加曽利 E 4 式期の住居址がほとんどみな柄鏡形敷石住居址である点は注目される。吹付遺跡 9 号住居址は柄鏡形の掘りこみに主体部にのみ敷石が施されている。4 号住居址は掘り込みは主体部しか確認されなかったものの、連結部に対ピットがみられる柄鏡形敷石住居址である。しかし、後期初頭においても西荒神遺跡 J 2 号住居址のようなほぼ円形の主体部の端に対ピットをもつが小さな張り出し程度の形状の住居址があり、吹付遺跡 9 号住居址や三田原遺跡群 3 号住居址にみられるような柄部が大形になる柄鏡形敷石住居址は定着しなかったようである。つまり、千曲川を下った小諸市久保田遺跡や屋代遺跡 B 地点などでは敷石住居址や柄鏡形住居址で集落が形成されている遺跡があり、中期末葉加曽利 E 4 式期から後期前葉堀之内式まで続くが、遺跡によって

は柄鏡形住居址でない敷石住居址も存在することから柄鏡形住居址が濃密に分布する南関東地域より独自性が強いといえよう（本橋 1989・1990）。さらに、重要なことは滝沢遺跡J10号住居址のように加曾利E4式の古段階に柄鏡形になるような敷石住居址が存在する点であり、加曾利E4式土器を伴っている点にある。

(3) 柄鏡形敷石住居址の出現

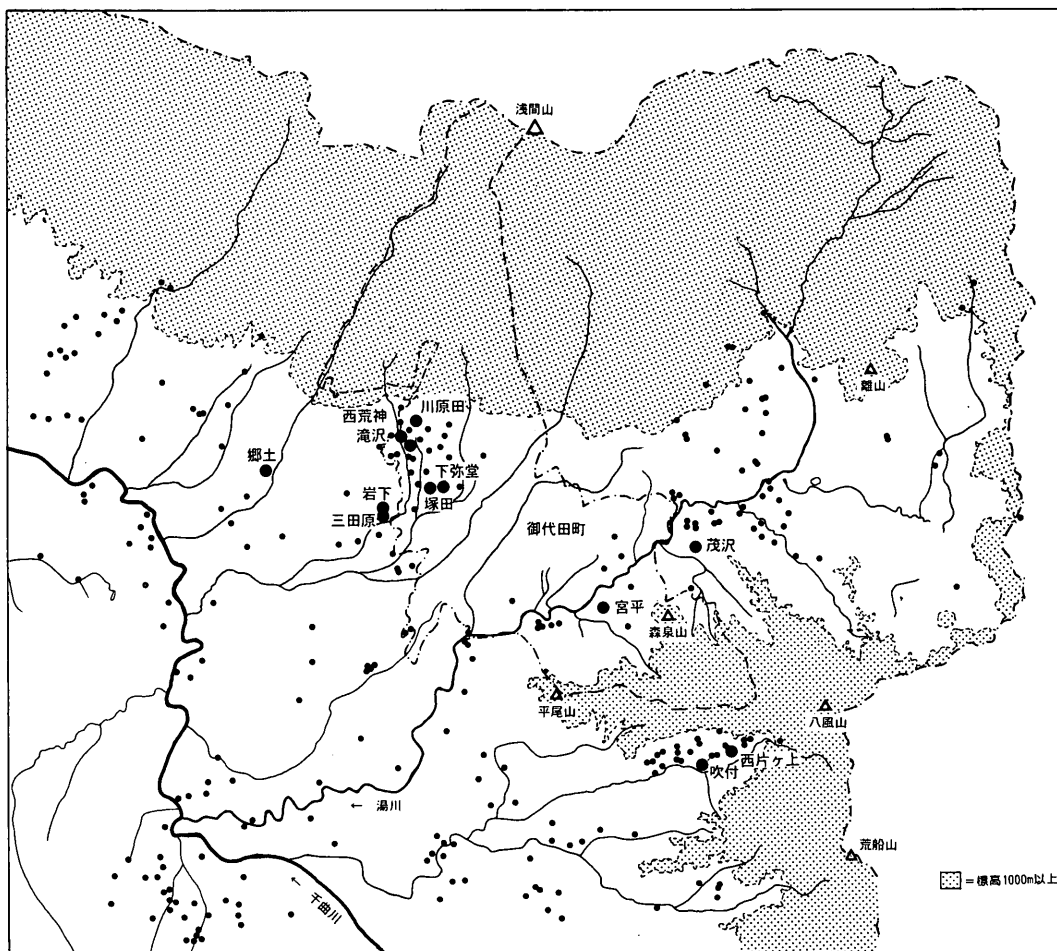
柄鏡形住居址の古いものは、南関東の神奈川県猿田遺跡や当麻遺跡、新戸遺跡で加曾利E3式新段階（口縁部文様帯の消失した土器）にみられたり、加曾利E3式土器に加曾利E4式土器が伴っていたりする。南関東では、加曾利E4式期以降柄形住居址が定着する。一方、敷石住居址は加曾利E3式土器の口縁部文様帯をもつ土器を伴って、群馬県富岡市田篠中原遺跡などでもみられ、屋代B遺跡でもこの時期の敷石住居址が存在することより、中部地方でも加曾利E3式段階でみられることから土器編年の問題もあるが、早い時期に北関東・中部北信地域に伝わった可能性が考えられる（本橋 1988・1990・1996）。

宮平遺跡では柄鏡形（敷石）住居は、加曾利E4式期にみられ、それ以前は円形ないし楕円形の竪穴住居址であるようである。滝沢遺跡では加曾利E3式（新段階）にやや五角形ともとれる円形の竪穴住居J-13号住居址があり、加曾利E4式期になると楕円形のJ-7号住居址の他は対ピットをもつ柄鏡形敷石住居址や対ピットをもつ楕円形の竪穴住居址がみられる。宮平遺跡や滝沢遺跡周辺では小諸市の郷土遺跡や久保田遺跡、佐久市三田原遺跡群・岩下遺跡・吹付遺跡のような明確な張り出し部をもつ柄鏡形住居址は浸透しなかったのであろうか。いずれにしろ、浅間山麓南部から東部で、遺跡によっては加曾利E3式（新段階）期に柄鏡形（敷石）住居址が出現し、加曾利E4式から堀之内2式期に柄鏡形（敷石）住居址として存続していたと考えられる。このとき宮平遺跡や滝沢遺跡などの事例から“柄鏡形”というより“敷石”である点が、浅間山麓の加曾利E4式期において住居址を構築する条件であったとも考えられる。この傾向は柄鏡形住居址が最も濃密に分布する南関東と対称的であろう。敷石材の乏しい地域では“柄鏡形”であることに固執し、敷石や配石がない住居址が多いからである。

浅間山麓において受容の程度は遺跡によって大きく異なるが、早い時期から（柄鏡形）敷石住居址が加曾利E3式土器や加曾利E4式土器にともなって存在することは、関東地方の強い影響下にあった地域であることを肯定している。

(4) 柄鏡形（敷石）住居址の構造

本遺跡では限られた調査であったために、住居址の形態がわかる敷石住居址はみられないが、そのなかでも中期末葉加曾利E4式期のJ-9号住居址や後期前葉堀之内1式期J-12住居址で



第3図 浅間山麓周辺の縄文遺跡分布

は板状の平石を敷石材として用いる。両者とも石囲炉で主体部全体に石が敷かれているようである。J-9号住居址では連結部に埋甕がみられ、対ピットが溝状に連なっている。J-12号住居址では炉址に土器が埋設されており、柄鏡形敷石住居址の时期的な特徴を備えている。

滝沢遺跡では円形もしくは方形のプランに敷石が施される住居址で、掘り方が柄鏡形であるような住居址はみられない。加曽利E4式期の敷石住居址はJ-8号とJ-10号などである。J-8号は楕円形の掘り方に石囲炉を中心として石が敷かれている。主体部の柱穴は6本ないし7本で、連結部とみなされる部分に対応する4本のピットがあり、間に胴部下半から底部にかけての埋甕が存在する。J-10号は方形と想定される掘り方に柱の内側に敷石が施される住居址で、石囲炉の北側に一部石がない空間が存在する。柱と考えられるピットは6本で、南側に対ピットがあり間に埋甕がみられる。埋甕は口縁から底部にかけての両耳壺が用いられている。他に遺存状態の良い住居址はJ-5号住居址で不整円形の掘り方に敷石が部分的に残存している。柱穴にな

りそうなピットは7本あるいは8本壁際にあるが、他にピットが7ないし8個ある。このうち、南側の壁際のピット2個が位置や大きさから対応しているようで、対ピットとみなされる。滝沢遺跡では竪穴の形態では柄鏡形とはなり得ないが、対ピットが存在することから上屋構造は柄部をもつ柄鏡形と大差ないと考えられる。

滝沢遺跡の事例と異なって西荒神J2号住は柱穴が壁よりで本数が多く、柄部も小規模ではあるが突出した特徴がある。柱穴は石囲炉を中心として同心円状の位置にあり、柄部ではピットが対応する位置にあり、土坑がみられる。敷石はおそらく住居使用時点にはあったであろうが、柄部や柱穴近くに残るのみである。称名寺式期である。

西荒神J2号住と同じく後期初頭の佐久市西片ヶ上遺跡第1号住居址は竪穴のプランにおいても明確な柄鏡形を呈する。主体部はやや楕円形に歪んだような形状であるが、柄部は長さが1m以上も張り出した柄鏡形住居址で、柄部の敷石は比較的遺存状況が良いようである。なお、連結部が括れたような形状で、主体部の東側にテラスをもっている。炉址は石囲炉であった可能性があり、他の敷石住居址と同じ長方形である。

佐久市吹付遺跡で遺存状態が良いのは、加曽利E4式期の4号住居址と9号住居址である。4号住居址は楕円形の主体部に炉址を中心として方形に石が敷かれ、連結部から柄部の一部に石が残された柄鏡形敷石住居址で、柱穴とみなされるピットは敷石に接する部分の角など5本あり、連結部に対ピットがある。柄鏡形住居址の多くは西荒神遺跡例のように壁に近い位置に柱穴が巡る“壁柱穴”が多いが4号住居址は壁と炉址との中間の位置にある点が特徴的である。連結部に1個、柄部に3個の土器が埋設されている。敷石材は板状石を用い、間隙に小礫を埋め込む点では敷石住居址によくみられる特徴がある。9号住居址の柄鏡形の竪穴住居址で、主体部のみ敷石がみられる。壁柱穴で、内側に敷石が施されている。連結部の対ピットの間に土坑、柄部には対応する溝がみられる。主体部の敷石には炉辺部右側から柄部にかけて敷石がみられない。炉址は方形で、底に加曽利E4式土器の大形破片が敷かれていた。敷石材はやはり板状石を用い、間隙に小礫を埋め込んでいる。9号住居址は壁柱穴であることと、対ピットや対の溝が柄部にみられる点は柄鏡形住居址の典型的な事例であろう（本橋 1988）。

西片ヶ上遺跡や吹付遺跡4号住居址にみられる特異な形状は地域の特徴というより、遺跡の個性あるいは遺構（住居址）の個性としてとらえられよう。

(5) 御代田・佐久地域の敷石住居址

当該地は、千曲川の支流に遺跡が位置しているためか、中期後葉に大木式土器の影響がみられる土器や後期初頭では新潟県の三十稻場式土器がみられる。たとえば、西片ヶ上遺跡では三十稻場式土器を伴った柄鏡形敷石住居址がある。各地域の要素が融合したような観を抱く。しかし、

浅間山麓の他地域に比べると、当地は碓井峠など山を隔てて北関東地方、利根川最上流域地域と隣接しているためにより加曽利E 3式・加曽利E 4式土器が多く出土する。特に群馬県松井田町では柄鏡形住居址や敷石住居址がみられる点からも、当地はより関東地方の影響が多くみられる地域であることが指摘できるのである。

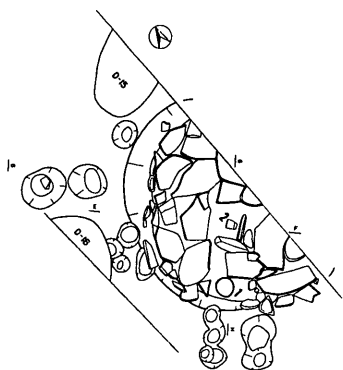
浅間山麓では加曽利E 4式期の住居址は敷石住居址もしくは柄鏡形住居址であろう。敷石材は八風山の産地と考えられる板状石が用いられ、方形に囲った炉址を中心として石が敷かれている。佐久市や小諸市では明確な竪穴の柄鏡形に敷石が施される住居址であるが、御代田町では明確な柄部の張り出しがない敷石住居址が多い。なお、軽井沢町茂沢南石堂遺跡の後期の敷石住居では、竪穴は確認されない敷石住居であった。浅間山麓において御代田・軽井沢周辺のごく限られた地域で、柄鏡形住居址が流行する加曽利E 4式期から後期前葉まで、明確な張り出し部をもたないあるいは竪穴の形状が柄鏡形でない敷石住居址が存在することは独自の地域性というものを考えねばならないだろうか。または、地域的な特徴というより遺跡ごとの個性としてとらえられようか。

(6) まとめ

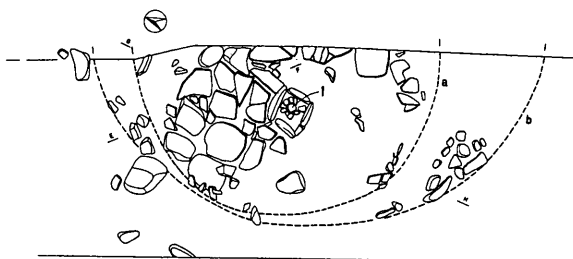
柄鏡形住居址は旧稿でのべたように(本橋 1988)、南関東で加曽利E 3式(新段階)に発生したと考えられる。この時期以降、加曽利E 4式期では柄鏡形(敷石)住居址が南関東を中心として、北関東、中部地方、東北地方南部まで分布が広がる。しかし、分布が最も濃密なのは南関東である。北関東では、加曽利E 4式期に柄鏡形住居址で集落を構成する遺跡もあれば、同じ時期に円形の竪穴住居址である遺跡も存在する。たとえば、前者が荒砥二之堰遺跡などで、後者が荒砥北原遺跡などである。屋代B遺跡では口縁部文様帯をもつ加曽利E 3式土器をもつ柄鏡形(敷石)住居址が発見された。加曽利E 3式土器の古段階では、円形竪穴住居が多いが敷石住居は既に存在しており、配石遺構や埋甕とが融合して柄鏡形住居址が出現したと考えられる。屋代B遺跡の加曽利E 3式期の柄鏡形住居址をめぐるのは、柄鏡形住居址発生の問題だけでなく、土器編年の問題にも言及する必要がでてこよう。

引用・参考文献

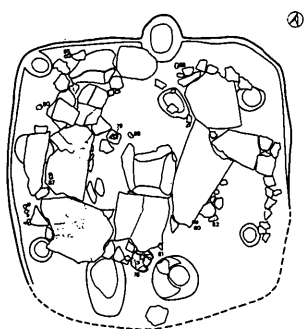
- 上野佳也ほか 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』軽井沢町教育委員会
神奈川考古同人会 1985 『縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曽利E式と曾利式土器の関係について』神奈川考古学会
小山岳夫ほか 1995 『東荒神遺跡・西荒神遺跡・下大宮遺跡・関屋遺跡・中屋敷遺跡』御代田町教育委員会



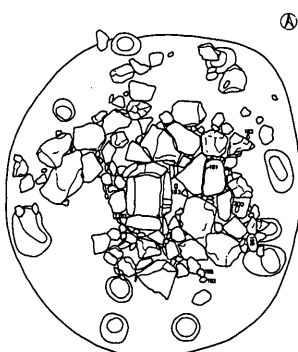
宮平遺跡 9 号住居



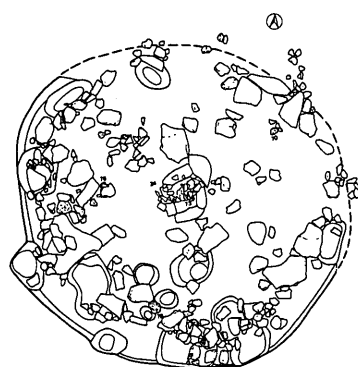
宮平遺跡 12 号住居



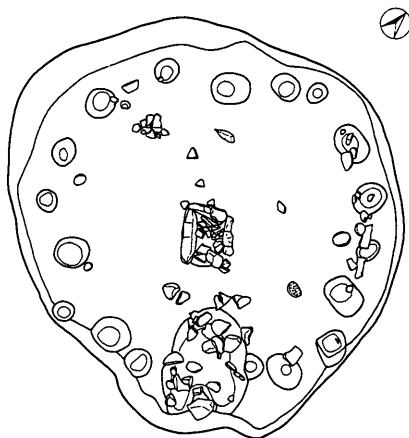
滝沢遺跡 10 号住居



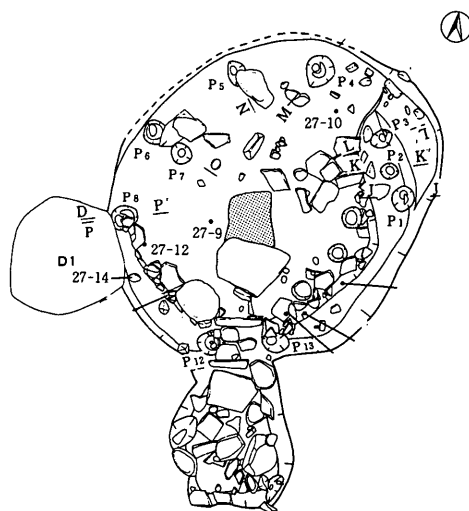
滝沢遺跡 8 号住居



滝沢遺跡 5 号住居

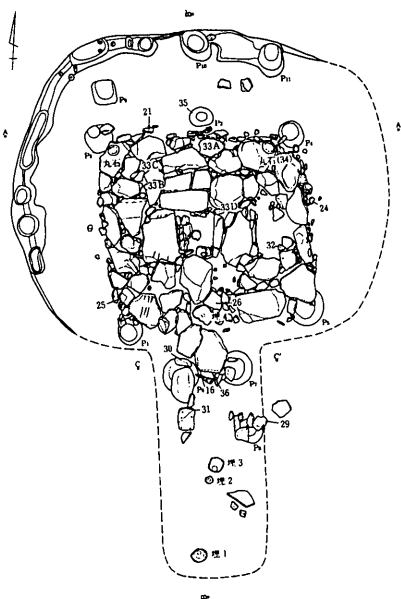


西荒神遺跡 2 号住居

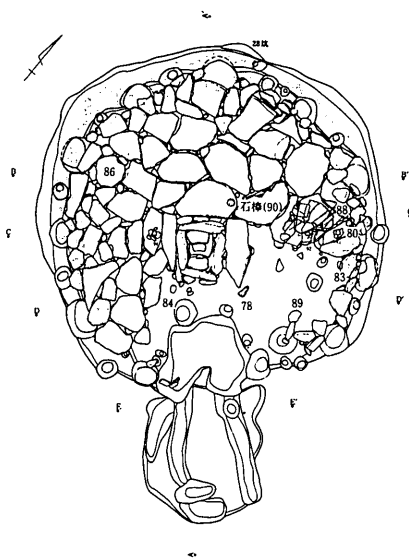


西片ヶ上遺跡 1 号住居

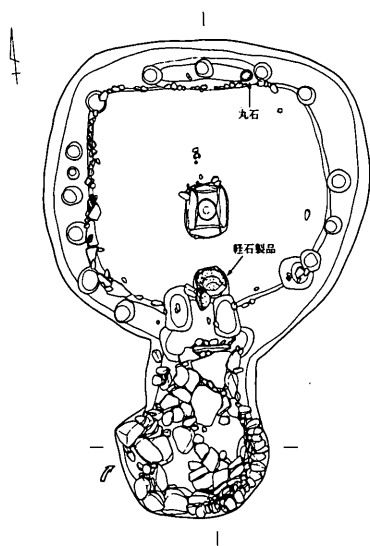
第 4 図 佐久地域の敷石住居



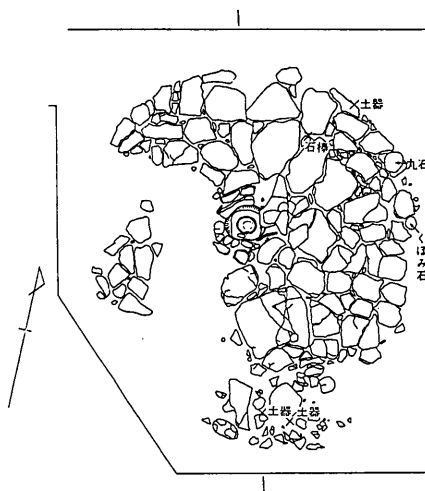
吹付遺跡 4号住居



吹付遺跡 9号住居



三田原遺跡 3号住居



茂沢南石堂遺跡 5号遺構

- 小山岳夫ほか 1997 『塩野西遺跡群 滝沢遺跡』長野県御代田町教育委員会
- 羽毛田伸博ほか 1987 『佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第6集 淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ』佐久市埋蔵文化財調査センター
- 本橋恵美子 1988 「縄文時代における柄鏡形住居址の研究—その発生と伝播をめぐって」『信濃』第40巻第8号・9号
- 本橋恵美子 1992 「『埋甕』にみる動態について—縄文時代中期後半の遺跡の検討から—」『古代』第94号
- 本橋恵美子 1995 「縄文時代の柄鏡形敷石住居址の発生について」『帝京大学山梨考古学研究報告』第6集
- 百瀬忠幸他 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐久市内その2』日本道路公団東京第2建設局 長野県教育委員会 財団法人長野県埋蔵文化財センター
- 柳澤 清一 1995 「加曾利E式土器の細別と呼称（前編）」『古代』第80号
- 柳澤 清一 1986 「加曾利E式土器の細別と呼称（中編）」『古代』第82号
- 柳澤 清一 1992 「加曾利E（新）式編年研究の現在」『古代』第94号
- 山本 孝司 1992 「加曾利E 3－4式と曾利V式について—神奈川県新戸遺跡出土資料を再検討して—」『古代』第94号
- 山本暉久 1976 「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』28巻